

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (44)

特定交通安全施設整備事業一般地方道伊集院日吉線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

諏訪免遺跡

2002 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、鹿児島県土木部の特定交通安全施設整備事業一般地方道伊集院日吉線改良工事に先だって、平成11年に実施した諏訪免遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

遺跡の所在する伊集院町は九州新幹線や西回り自動車道など近年の大規模開発に伴う発掘調査が進み、さまざまな時代の遺跡が発見されています。今回の調査は発掘面積が約100㎡と小規模なものでしたが、縄文時代後期の土器が多数出土しました。遺跡は神ノ川の河岸段丘上に位置しており、今回はその末端部を調査したに過ぎませんが、良好な遺跡の存在を窺わせるものでした。

本報告書が、南九州の歴史研究に寄与し、併せて県民の皆様方の埋蔵文化財に対する理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査に御協力いただいた県土木部の関係者・伊集院町教育委員会並びに地元の皆様に心から感謝いたします。

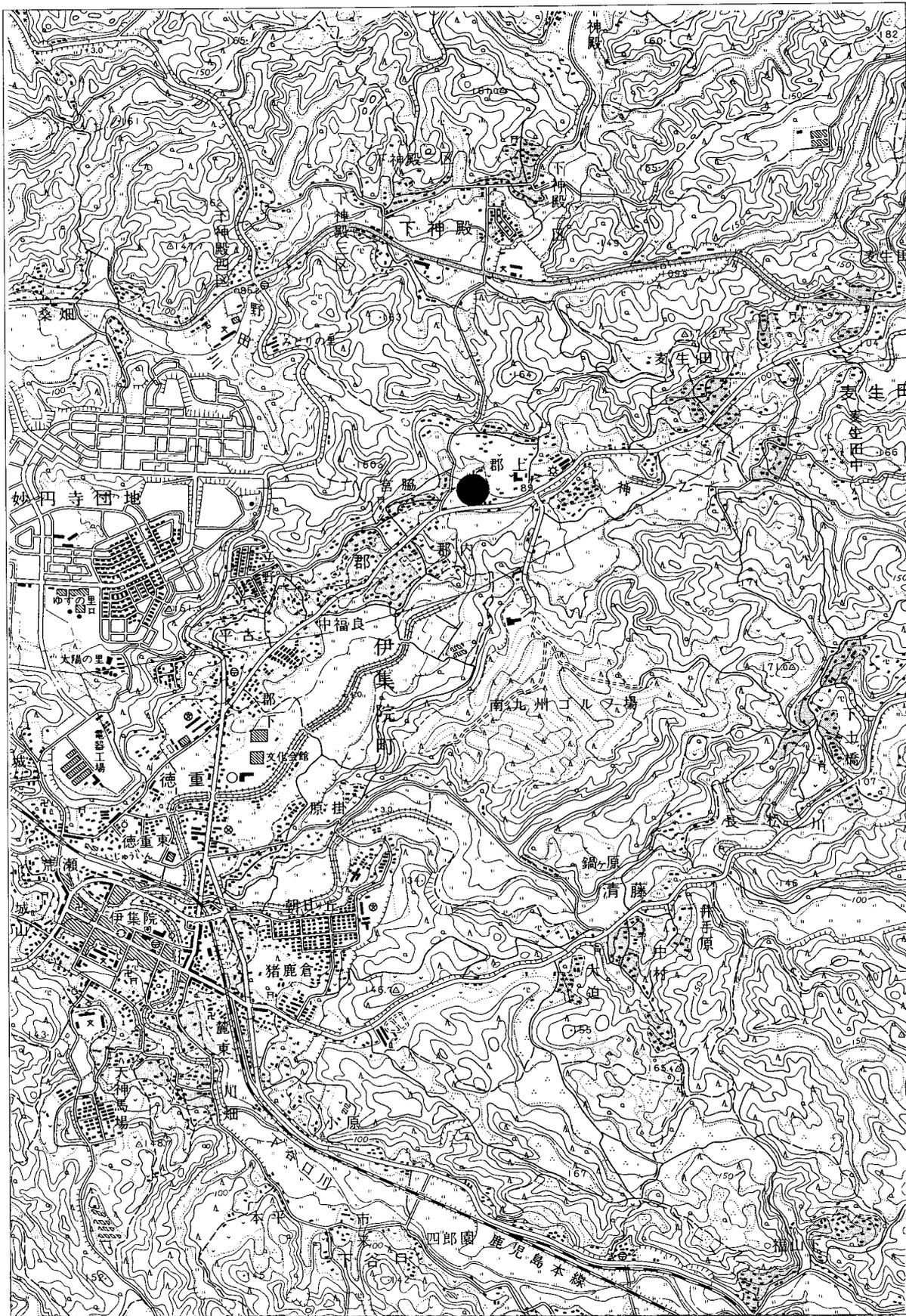
平成14年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

報告書抄録

ふりがな	すわめんいせき							
書名	諏訪免遺跡							
副書名	特定交通安全施設整備事業一般地方道伊集院日吉線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	44							
編著者名	大久保浩二 上床 真							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252							
発行年月日	2002年(平成14年)3月31日							
フリガナ			コード					
所蔵遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
すわめんいせき 諏訪免遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 いじゅういんちょうごおり 伊集院町郡	30	65	31° 38' 30"	130° 24' 55"	11.11.21 ～ 11.11.30	100 ㎡	県道 改良
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
諏訪免遺跡	散布地	縄文時代後期	無し	南福寺式土器 出水式土器 指宿式土器				



第1図 諏訪免遺跡位置図 (2万5千分の1)

例 言

- 1 本書は、特定交通安全施設整備事業一般地方道伊集院日吉線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部道路維持課の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査に於ける測量・実測・写真撮影等は調査担当者が行った。
- 4 本書掲載の実測図等の浄書は、整理作業員の協力を得て、大久保・上床が行った。また遺物の分類にあたっては前迫亮一氏の協力を得た。
- 5 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。
- 6 挿図の縮尺は各図ごとに示している。
- 7 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 出土遺物の写真撮影及びプリントは、鶴田静彦氏・福永修一氏・横手浩二郎氏の協力を得た。
- 9 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 - 第1章・・・・・・・・大久保浩二
 - 第2章・・・・・・・・繁昌正幸
 - 第3章
 - 第1節、第2節・・・大久保浩二
 - 第3節・・・・・・・・上床 真
 - 第4章・・・・・・・・上床 真、大久保浩二
- 10 本書の編集は大久保・上床が行った。
- 11 遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画である。

諏訪免遺跡発掘調査報告書

目 次

序 文

報告書抄録

第1章 調査の経過と組織	7
第1節 調査に至るまでの経過	7
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過	8
第2章 遺跡の位置および環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 層序	13
第3節 調査の成果	15
(1) 土器	15
①口縁部	15
②底部	23
(2) 円盤形土製品	23
(3) 石器	23
第4章 調査のまとめ	30

写真図版

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	周辺遺跡	12
第3図	遺跡周辺地形図	13
第4図	土層断面図	14
第5図	土器（Ⅰ類、Ⅱ類①）	17
第6図	土器（Ⅱ類②）	18
第7図	土器（Ⅱ類③）	19
第8図	土器（Ⅲ類）	20
第9図	土器（Ⅳ類①）	21
第10図	土器（Ⅳ類②、その他）	22
第11図	土器（底部A類、B類①）	24
第12図	土器（底部B類②）	25
第13図	土器（底部B類③、C類、D類）	26
第14図	円盤形土製品	27
第15図	石器	27

表 目 次

付表 報告書抄録

第1表	周辺遺跡地名表（1）	10
第2表	周辺遺跡地名表（2）	11
第3表	土器観察表（1）	28
第4表	土器観察表（2）	29

図 版 目 次

図版1	調査地全景・遺物出土状況・完掘状況	33
図版2	土層堆積状況・発掘作業風景	34
図版3	出土遺物（1）	35
図版4	出土遺物（2）	36
図版5	出土遺物（3）	37
図版6	出土遺物（4）	38
図版7	出土遺物（5）	39

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部道路維持課は、一般地方道伊集院日吉線改良工事区内に所在する諏訪免遺跡の取り扱いについて、鹿児島県教育委員会文化財課（以下県文化財課）に照会した。

これを受けて県文化財課は、平成11年10月4日に試掘調査を実施した。その結果、約100㎡の範囲に遺物包含層が確認された。

この試掘調査結果を基に県土木部と県文化財課は協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業の推進との調整を図るため、事業着手前に埋蔵文化財の全面調査を実施することになった。調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターに依頼し、平成11年11月21日から11月30日までの実働5日間行った。

また遺物の整理及び報告書作成は平成13年度に行った。

第2節 調査の組織

（1）発掘調査（平成11年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路維持（伊集院土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉 永 和 人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒 木 友 幸
	〃	調 査 課 長	戸 崎 勝 洋
	〃	調査課長補佐兼	
		第一調査係長	新 東 晃 一
調査事務担当	〃	総 務 係 長	有 村 貢
	〃	主 事	溜 池 佳 子
調査担当	〃	文 化 財 主 事	繁 昌 正 幸
	〃	〃	大久保 浩 二

発掘調査作業員

天野 豊子	宇都 妙子	尾堂佳代美	柿内 弘巳	仮屋 郁夫	岸上 正子
久保 紀子	園田 辰男	茶屋道良子	橋木 妙子	馬場園弘子	堀内 朗子
宮下 巧	宮下マキ子	宮之脇綾子	森田 辰夫	山口 節子	

（2）報告書作成（平成13年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路維持（伊集院土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井 上 明 文
調査企画者	”	次長兼総務課長	黒 木 友 幸
	”	調 査 課 長	新 東 晃 一
	”	調 査 課 長 補 佐	立 神 次 郎
	”	第一調査係長	青 崎 和 憲
	”	主任文化財主事	中 村 耕 治
調査事務担当	”	総 務 係 長	前 田 昭 信
	”	主 査	栗 山 和 己
調査担当	”	文化財主事	大久保 浩 二
	”	文化財研究員	上 床 真

整理作業員

四丸久美子 岡部 安代 市藺 厚子 齊藤 千鶴 北上千津子

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成11年11月22日から11月30日までの期間で実働5日間行った。

報告書作成作業は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて平成13年度に実施した。

以下、発掘調査の経過を日誌抄にて示す。

- 11月22日（月） 器材搬入。重機による表土剥ぎ作業。A区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。その結果、Ⅱ層は旧耕作土であることが判明。
- 11月24日（水） A区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。縄文時代後期の土器が出土。遺物出土状況撮影後、遺物の取り上げ。Ⅴ層まで掘り下げてA区完掘。
- 11月25日（木） B区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。縄文時代後期の土器が出土。
- 11月26日（金） B区のⅣ層掘り下げ。遺物出土状況撮影。遺物取り上げ。
- 11月30日（火） Ⅵ層まで掘り下げて、下層を確認。完掘状況撮影。土層断面図実測。器材を搬出し、調査終了。

第2章 遺跡の位置および環境

第1節 地理的環境

諏訪免遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町大字郡に所在する。

遺跡のある伊集院町は、薩摩半島のほぼ中央部に位置している。東は松元町を介して鹿児島市と、西は東市来町および市来町とそれぞれ境を接しているものの、薩摩半島の分水嶺が東の鹿児島湾（錦江湾）側に寄った松元町にあることから、西の東シナ海側に寄った地域といえるだろう。また、北は郡山町と、南は日吉町とそれぞれ接しており、位置的にも日置郡の中央部にあるといえるだろう。

地形的には、北に重平山、南西に矢筈岳・諸正岳という姿の整った山がそびえており、それぞれの山から広がった裾野は海拔150m前後の火山灰台地（シラス台地）となっており、さらにそのシラス台地は極めて侵食されやすい土質であることから、神之川およびその支流によって開析されて狭い谷底平野を形づくっている。神之川が合流するところは谷底平野の集合体となり、この地域としては割合に広い平野となっている。

その広い平野は、地理的にも、また、地形的にも日置郡の中心として発達しており、本県の各種の行政機関はもちろん、交通の要衝としてのJR鹿児島本線伊集院駅が置かれ、つい最近まで私鉄の鹿児島交通線の始発駅ともなっていた。国道3号線が市街地の北側を通過しており、県都鹿児島市と本県第3の都市川内市やその北につながる阿久根市・出水市を経て、熊本県およびあらゆる意味で九州の中心地である福岡県ともつながりを見せている。南へは、鹿児島交通線こそ廃止になってしまったが、加世田市やその東につながる指宿市へも国道がのびており、それらのことからこの伊集院の町が薩摩半島の中核を担う地域であることが窺い知れよう。そのことは、この町が経済的にも発展しており、商工業の中心地ともなっていることから理解されよう。

諏訪免遺跡は、市街地の北東部、国道3号線へとつながる中間に位置しており、周辺は次第に宅地化および市街地化が進んできており、すぐ東側を新幹線が通る計画となっている。遺跡の前方（南側）約100mのところには神之川の支流が流れており、遺跡は川を眼下に見下ろす標高約80mの緩やかな南側斜面の台地の縁辺に立地していることになる。

第2節 歴史的環境

伊集院町は、古代の律令制の下では日置郡に属していたとみられており、伊集院という地名は、平安時代に当地に倉院が置かれ、“いす院”（または“ゆす院”）と呼ばれていたことから、後に伊集院と呼ばれるようになったとされている。

本町は山に囲まれており、古い時代の遺跡も散見される。

旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器文化の下谷口の永迫平遺跡や鹿児島市と境を接する竹之山の瀬戸頭遺跡があげられる。特に瀬戸頭遺跡は、ナイフ形石器および細石刃も出土しているほか、次の縄文時代草創期の遺物もみられることから、遺跡の連続性という意味からも興味深い。

第1表 遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	諏訪免	郡字諏訪免	台地	縄文	前平式土器・石鏃・石斧	本報告
2	瀬戸頭	竹之山字瀬戸頭	台地	縄文	石器・土器片	
3	前迫	土橋竹山神社	台地	縄文	磨製石斧	
4	土橋クイハイ	土橋クイノハイ	台地	縄文	磨製石斧	
5	下土橋	下土橋	台地	縄文	磨製石斧	
6	石坂	郡字石坂	平地	縄文早期	土器片	
7	鍋倉	清藤鍋倉	台地	縄文	前平式土器・土器片	
8	猪鹿倉	猪鹿倉	平地	縄文	磨製石斧	
9	郡	郡(伊集院高校校庭)	沖積地	縄文～古墳	石器・土器	
10	寺脇	寺脇楠牟礼神社	台地	縄文～弥生	貝殻条痕文・弥生式土器片	
11	上山路山	大田上山路山	台地	縄文	石坂式土器・道跡	
12	永迫平	下谷口字永迫平	台地	縄文	前平式土器・石皿	
13	恋之原	恋之原	台地	縄文	前平式土器・石鏃	
14	稻荷原	恋之原字稻荷原	台地	縄文	前平式土器	
15	宮田	下神殿字宮田	平地	古墳	土器片	
16	小竹下	桑畑字小竹下	平地	古墳	土器片	
17	山ノ脇	郡字山ノ脇	台地	奈良～平安	土師器・須恵器	
18	後宮田	郡字後宮田	台地	奈良～平安	土師器片	
19	黒木田	郡字黒木田	台地	奈良～平安	土師器片	
20	長崎城跡	竹之山	山地	中世		
21	麦生田城跡	麦生田	山地	中世		
22	小城跡	徳重字小城	山地	中世		
23	大内山城跡(小城)	小城	山地	中世		
24	一字治城跡	大田	丘陵	中世		
25	内城跡(平城)	古城	山地	中世		
26	平等寺跡	麦生田字山下	小丘陵	中世	入定窟・石塔	
27	円福寺墓地群	寺脇甫ノ内	小丘陵	中世	伊集院忠国夫婦の墓	
28	石谷高久の墓	徳重	平地	中世		
29	じょがんどん境内	上神殿上	山地	中世・近世	五輪塔	
30	ゴアン寺跡	下神殿鶴丸	平地	中世・近世	五輪塔	
31	宮下墓地	麦生田宮下	山地	中世・近世	五輪塔・相輪	
32	九玉神社	郡九玉神社	平地	中世・近世	五輪塔	
33	桑畑	桑畑	山地	中世・近世	五輪塔・相輪	
34	殿ん墓	野田	平地	中世・近世	五輪塔	
35	法泉寺跡	野田	平地	中世・近世	五輪塔・無縫塔	
36	報恩寺跡	大田中	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
37	大知寺跡	大田上	台地	中世・近世	五輪塔・無縫塔	
38	円通墓地	城山	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
39	雪窓院跡	城山	山腹	中世・近世	五輪塔・無縫塔	
40	末隠寺境内	天神馬場	山腹	中世・近世	無縫塔	

第2表 遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
41	長寺庵跡	天神馬場	平地	中世・近世	五輪塔ほか	
42	竜泉寺跡	天神馬場	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
43	下谷口	下谷口	平地	中世・近世	五輪塔	
44	本平	本平浜田氏宅裏	平地	中世・近世	五輪塔	
45	本平	本平福留氏山林	山林	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
46	磨崖仏	麓東山山下氏宅	山腹	中世・近世	磨崖仏・五輪塔	
47	妙円寺墓地	徳重	山腹	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
48	荘厳寺墓地	猪鹿倉	平地	中世・近世	五輪塔・石地蔵ほか	
49	薬師堂跡	猪鹿倉	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔	
50	破鞋墓地	向江	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
51	梅岳寺墓地	四郎園	台地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
52	末永	窪田郵便局前	平地	中世・近世	五輪塔・相輪	
53	末永	末永八幡神社横	山地	中世・近世	五輪塔・宝塔ほか	
54	松尾城麓	古城	台地	中世・近世	五輪塔・相輪	
55	大山神社境内	古城	台地	中世・近世	五輪塔	
56	熊野神社境内	飯牟礼	平地	中世・近世	五輪塔・宝塔	
57	碓ノ谷	下土橋	台地	古代		
58	梅落	郡	台地	古代・中世	須恵器・土師器・青磁	
59	瀬戸頭B	竹ノ山	台地	旧石器縄文		
60	瀬戸頭C	竹ノ山	台地	旧石器縄文		

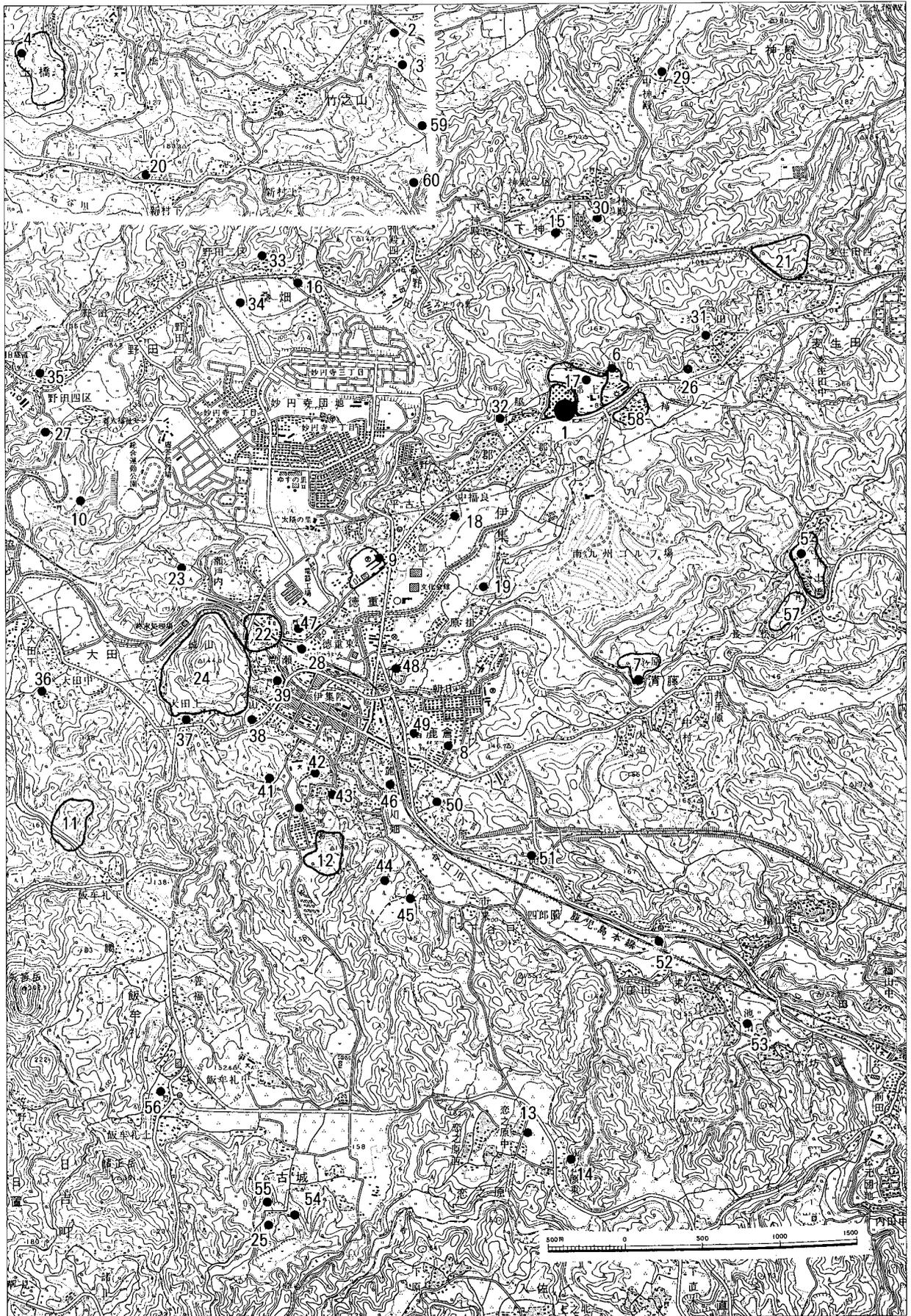
諏訪免遺跡と同時代—縄文時代となると、遺跡の数も急激に増加する。先程の瀬戸頭遺跡に続くところとしては、早期の道跡の発見された上山路山遺跡や、前平式土器の出土した永迫平遺跡、ベンガラ塗られた土器が出土して著名となった稻荷原遺跡などが挙げられるほか、土器片や磨製石斧の採集されている遺跡も数多い。

弥生時代の遺跡としては普く知られた遺跡は確認されていないが、奈良から平安時代の遺跡は、郡周辺に山ノ脇遺跡など次第に姿を現しつつあるといえる。

中世になると、本地域の重要性を物語るように、城館ばかりでなく、中世から近世にかけてのものを含めて、五輪塔や墓などが多くみられてくる。それらがあるということは、古刹や昔からの神社の存在が考えられ、今後とも幅広い時代についての考察が必要となる

地域ということがいえるだろう。

(繁昌正幸)



第2図 周辺遺跡

第3章 発掘調査

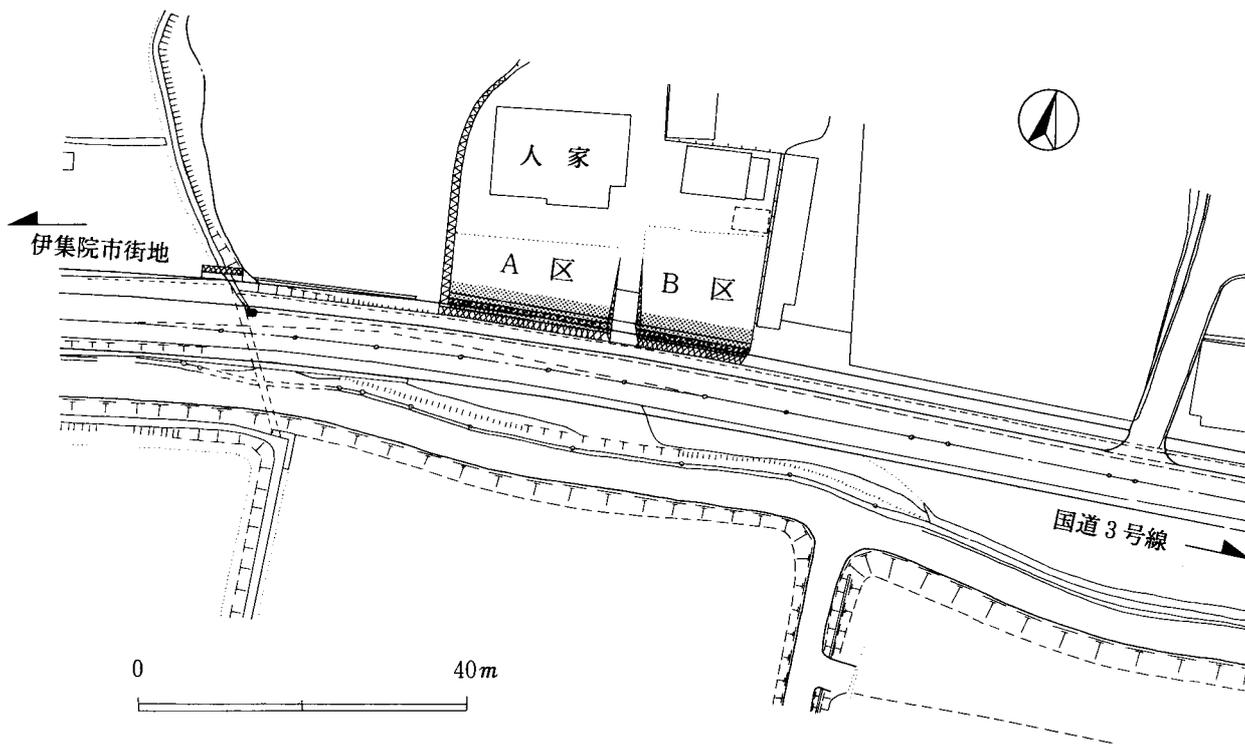
第1節 調査の概要

調査地は県道から約1.5m高い段になった畑であり、県道拡幅工事のため幅2m長さ30mの範囲を調査した。しかし重機によって表土を剥ぐと県道側はブロック塀の建設の際に破壊されており、包含層は幅1m程しか残存していなかった。

調査地の中央にある人家への進入路を境に、便宜的に西側をA区、東側をB区として調査を行った。まずA区から調査を行ったが、試掘調査の際に表土下の黒色土から遺物が出土していたため、重機で表土を除去した後は人力で掘り下げを行った。その結果、Ⅱ層の黒色土は旧耕作土であることが判明したため、B区はⅡ層まで重機で除去し、Ⅲ層より人力掘削を行った。

遺物はⅢ・Ⅳ層から縄文時代後期の土器・石器が出土した。遺物は層ごとに一括して取り上げを行ったが、整理作業の段階で不手際があり混在してしまった。誠に申し訳ない次第である。

遺構は調査範囲が非常に狭いこともあり発見されなかった。B区にはⅢ・Ⅳ層の落ち込みが認められたが、横転であると判断した。

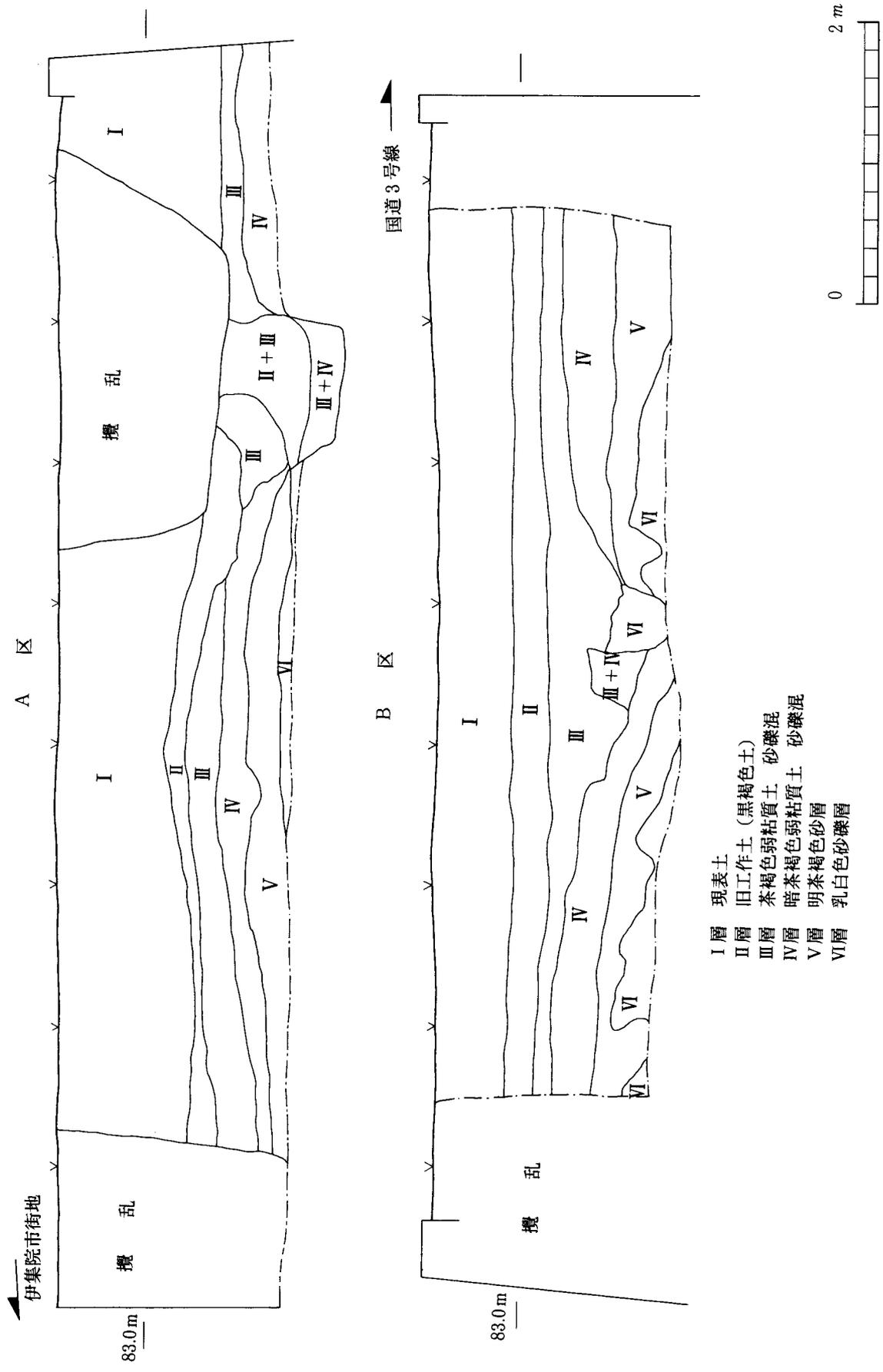


第3図 遺跡周辺地形図

第2節 層序

諏訪免遺跡は河岸段丘上に立地しており、その層位は全体的に砂質の土壌であった。現耕作土である表土の下に旧耕作土の黒褐色土があり、続いて遺物包含層であるⅢ層茶褐色砂質土、Ⅳ層暗茶褐色砂質土が堆積していた。その下には砂層と砂礫層が堆積していたが、これらの層からは遺物が出土しなかった。またアカホヤ火山灰や薩摩火山灰等の火山噴出物等は認められなかった。

土層断面は調査区の北壁を実測し図化した。



第4図 土層断面図

第3節 調査の成果

諏訪免遺跡から出土した遺物は、縄文時代中期末頃から後期前半頃までの時期のものであると考えられる。

調査面積が広くないことから出土した土器に関しては器形が判別できるほど接合できるものは多くはなかったが、あえていうならば深鉢形土器・円盤形（メンコ形）土製品などがみられる。なお、土器の中で直径を復元したものが数点あるが、これらは全て反転復元である。

石器類も石鏃・擦り切り石器・剥片などがみられたが、図化できるものは石鏃と擦り切り石器だけであった。

(1) 土器

全体が復元できる土器はないが、口縁部および底部の形態によって分類できるものがあったのでここで特に取り上げる。

この項で扱う土器は、口縁部を第Ⅰ類土器から第Ⅳ類土器およびその他に、底部をA類土器からD類土器に分類した。

① 口縁部 (1～63)

・第Ⅰ類土器（南福寺系）(1～7)

口縁部文様帯を意識してそこに太形の沈線や凹点を施し、基本的には口唇部は指頭凹点による波状口縁をなすもの。口唇部に施文のないものも若干含まれる。阿高式土器の流れをくむもので、基本的には南福寺式土器の範疇に含まれる。

1は阿高式土器の影響を強く残している土器で、口唇部の凹点を裏表交互に施すものである。

・第Ⅱ類土器（出水系）(8～31)

口縁部下をやや肥厚、そこを文様帯として沈線や凹点で文様を施す一群。出水式土器の範疇に含まれる。

(第Ⅱ類－a・8～19)

口縁部に指頭くの字文・縦位の並行沈線などが施文されるもの。口唇部には刺突文や刻み・沈線などが施文される。8はS字文を基調とした沈線文を不規則に施すもので口縁端部に刻みが施されるものであるが風化が強いため文様は明瞭でない部分がある。

(第Ⅱ類－b・20・21)

口唇部にいくつかの突起をもうけて、その部分にねじった粘土紐を貼りつけたもの。口縁部下の文様帯に沈線を施すものと無文のものがある。沈線を施すものは縦位の並行沈線および横位の並行沈線の組合せによる直線的な文様が施されている。

(第Ⅱ類－c・22～31)

口縁部下に沈線や凹点で文様を施すもの。施文具には半截竹管を用いたと考えられるものもある(28・29)。また、1点ずつではあるが口縁部下に縦位または横位に突帯をもつものもある。基本的に口唇部には文様は施されない。

・第Ⅲ類土器（指宿系）(32～45)

口縁部下を沈線で飾る一群。指宿式土器の範疇に含まれる。口唇部にいくつかの突起を設け、突起部内面に沈線で施文するものもある。なお突起部内面の沈線区画内に疑似縄文を施すものもある

が、これは若干新しい要素ととらえられる。

(第Ⅲ類－a・32～37)

口縁部の四隅に突起を持つ波状口縁で、突起部に内面に施文する。口縁部外面には横方向に沈線を施す。器壁の厚さは比較的薄手である。なお、突起部内面の文様に疑似縄文が施文されているものがあるがこれは若干新しい要素である。

(第Ⅲ類－b・38～45)

口縁部下を沈線で飾るものの中で波状口縁とは確認できないものをここに集約した。基本的には幾何学的な文様をもつものである。施文具には半截竹管を用いたと考えられるものもあり(40・44・45)、この場合は直線的な沈線を斜位に施している。

・第Ⅳ類土器(46～60)

I～Ⅲ類に伴う無文のものを集約(一部に沈線をもつものも含む)

(第Ⅳ類－a・46～50)

基本的に無文であるが口唇部にいくつかの突起をもうけるもの。この突起部には凹点が施されており、無文であることを除けばⅡ類土器とほぼ同じ要素を持つことから、Ⅱ類土器(出水式系)の時期のものと考えられる。

(第Ⅳ類－b・51～60)

I～Ⅲ類のいずれかに伴うもの。無文であるので時期等については明確には区別しがたい。表面はナデを施すものと条痕を施すものがある。

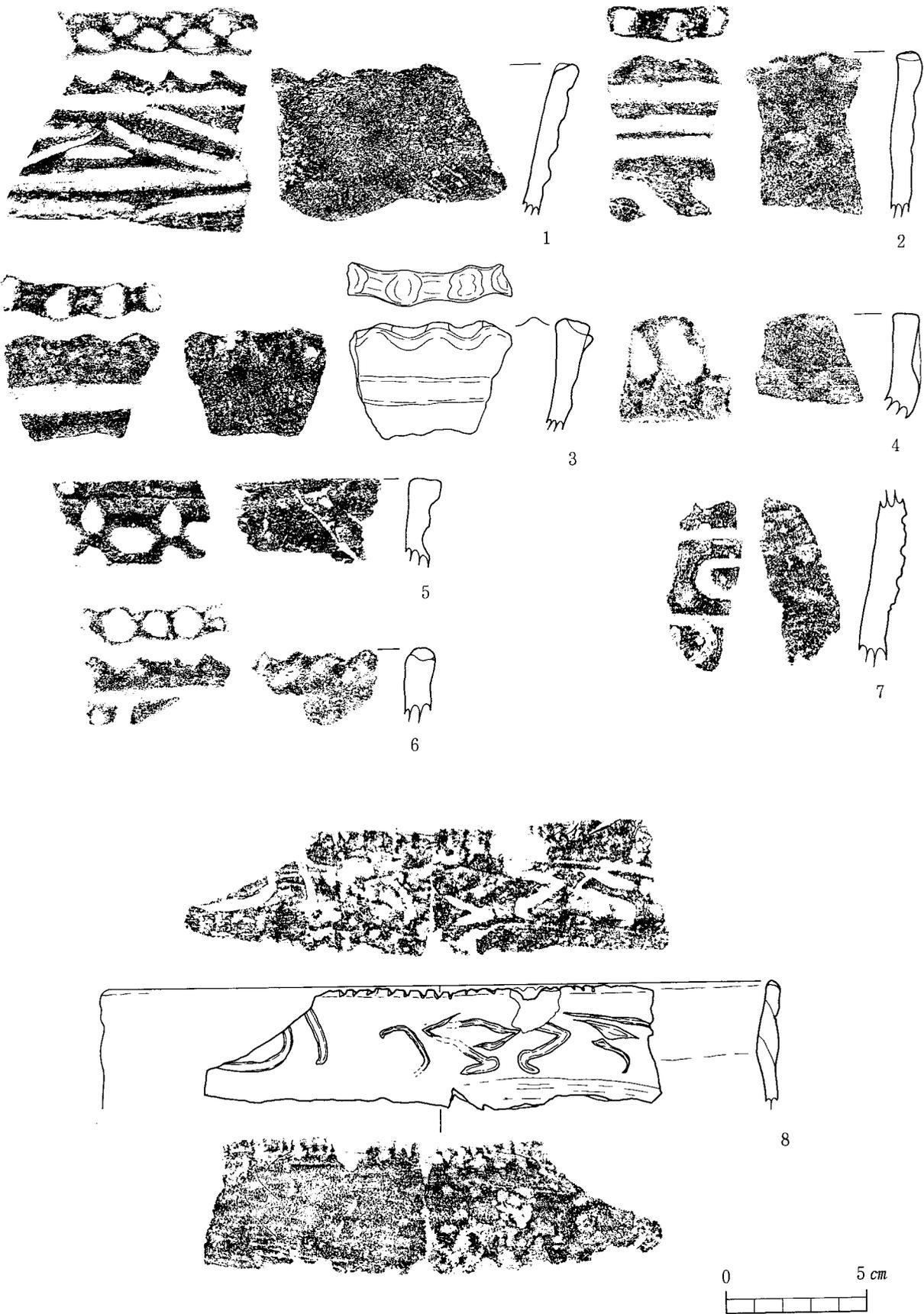
60は胎土に滑石を混入するものである。滑石を混入すること自体が中期の土器の流れをくむものとされているので、これに限ってはⅠ類土器(南福寺式系)の時期のものである可能性がある。表面には貝殻によるものとみられる条痕がみられるものである。

・その他(61～63)

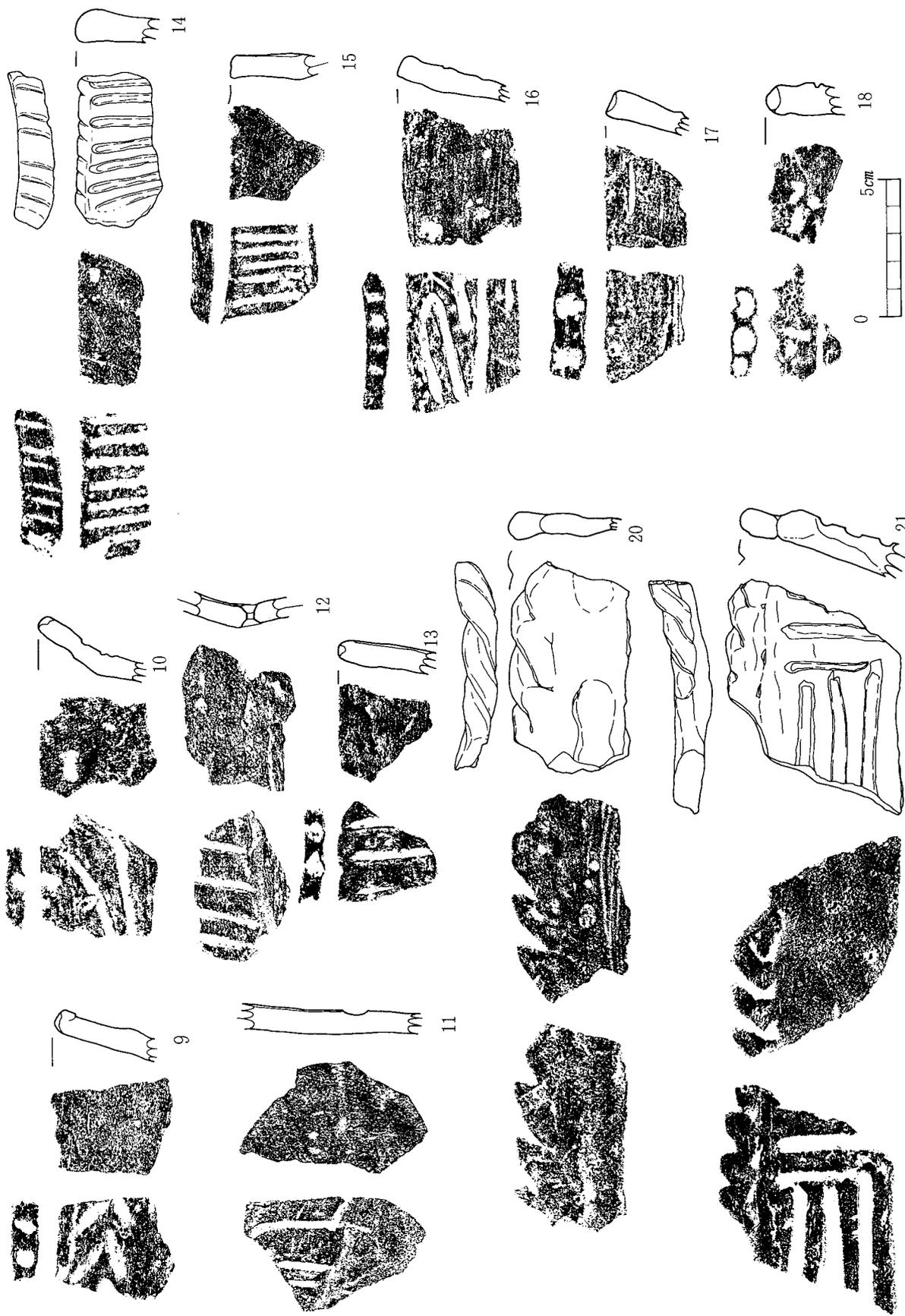
61は口唇部直下外面に横位の突帯を貼り付けて指押さえを施したような痕跡がみられるものがあるが、突帯部分で残っているのはわずかであったためはっきりとは観察できなかった。なお出水式の時期には突帯のついた土器がみられる場合があるのでほぼ第Ⅱ類土器(出水系)の時期であると考えられる。

62は無文であるので本来は第Ⅳ類土器に入れるべきものであるが、胴部片であるので口縁部の状況がはっきりと確認できないという理由からここに入れた。

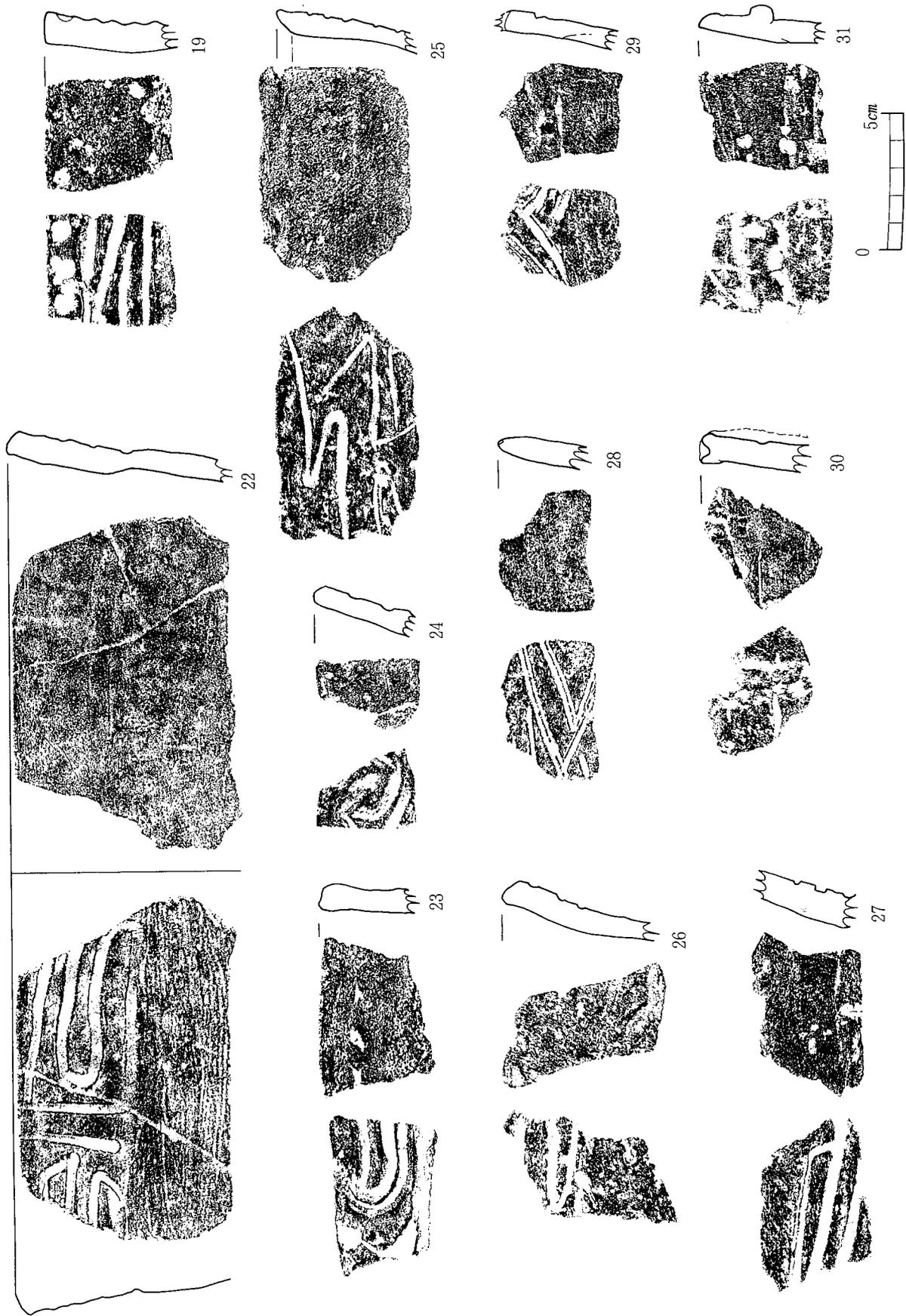
63は口縁部が「く」の字状に屈曲して外反するもので、縄文(磨消縄文か)を施すものである。



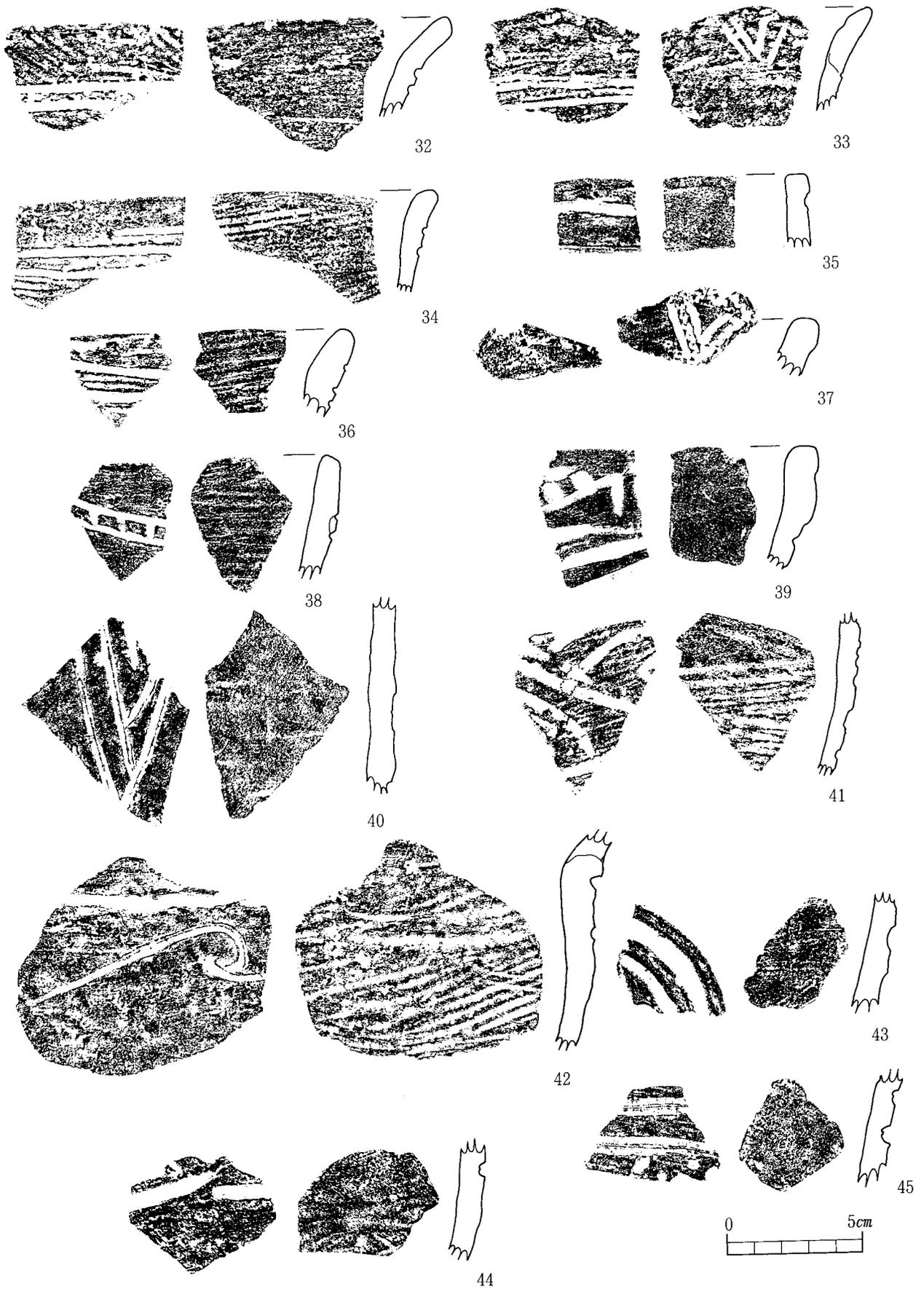
第5図 土器 (I類, II類①)



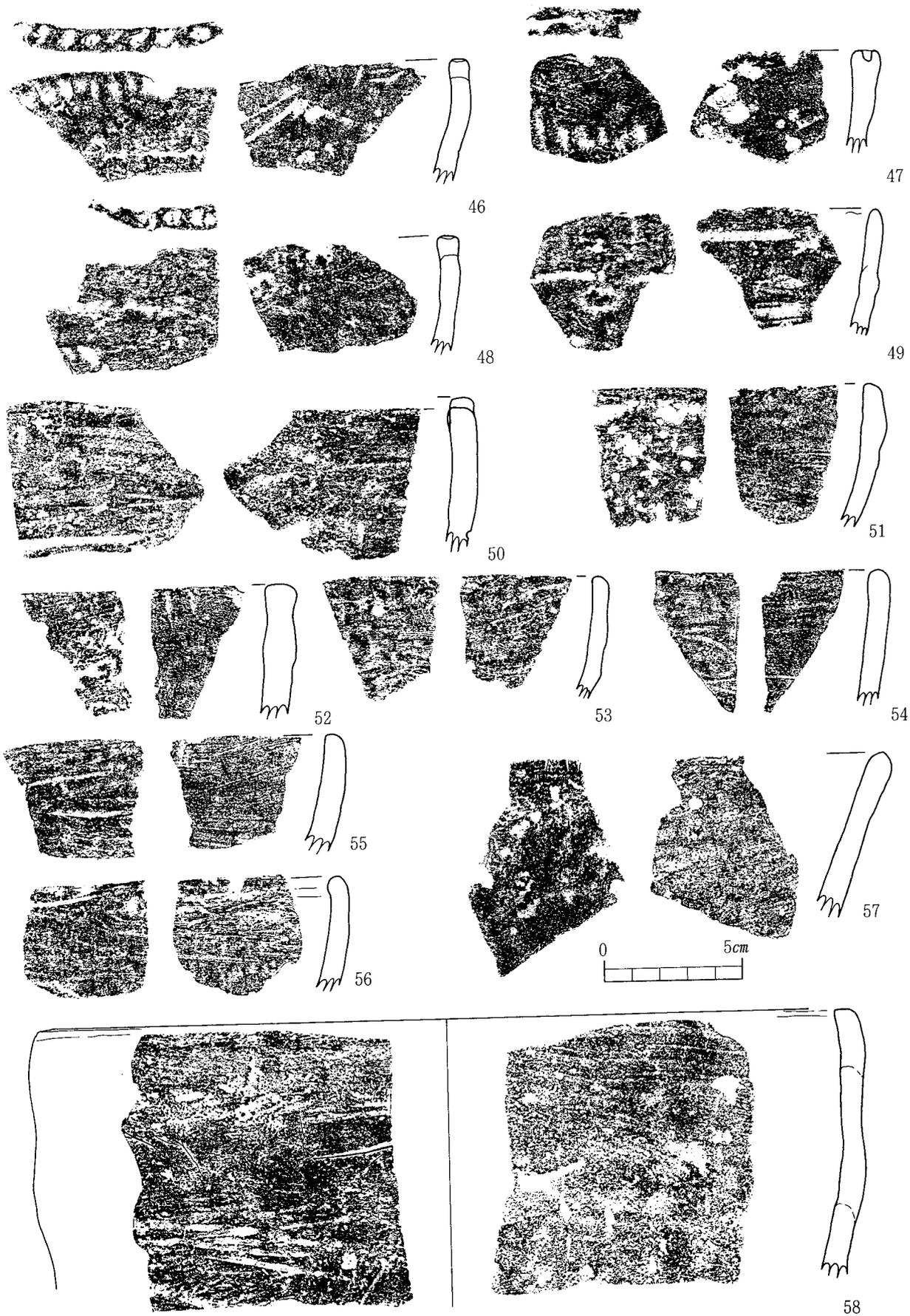
第6図 土器 (II類②)



第7図 土器(Ⅱ類③)



第8図 土器 (Ⅲ類)



第9図 土器 (IV類①)



第10図 土器 (IV類②, その他)

② 底部 (64~96)

・ A類土器 (64・65)

胴部外面の底まで沈線が施されている一群。口縁部の第 I 類土器 (南福寺式土器系) とほぼ同時期と考えられるもの。器壁は比較的厚手である。

・ B類土器 (66~84)

基本的に無文であり、際立った特徴をもたないもの。全体的に底部そのものの残りはよくないものが多い。

67は底部から 1 cm ほど上まで直線的に上がり、そこでくびれを持つものである。これ以外のものはほとんどが底部がやや張り出すかやや外反して上に伸びるものである。

74は中心付近を指などでおさえてわずかな上げ底にしているもので、68・70・77・84なども同じような意図が働いていた可能性がある。79は粘土紐の接合痕が明瞭に残るもので、粗製品であると考えられる。84は底部内面に貝殻によるものとみられる条痕があるもので、底部はわずかに上げ底のようになっている。

・ C類土器 (85~93)

底部に網代・木葉 (葉脈) ・鯨骨等の圧痕がみられるもの。

89~91は底部に網代の圧痕、92は鯨骨の圧痕が、93は木の葉の圧痕がみられるものである。85は底部に工具によるものとみられる沈線のような筋がみられるが底部から胴部にかけてもみられるので厳密な意味での底部施文ではない。86~89はもともとは網代もしくは鯨骨による圧痕があった可能性があるがナデ消されていてはっきりとはわからないものである。89も網代の圧痕が確認できるがナデ消された部分がみられる。

・ D類土器 (94~96)

高い上げ底のもので、一見すると成川式土器の甕の脚部に似ている。南福寺式・出水式の時期に多くみられるものである。

(2) 円盤形 (メンコ形) 土製品 (97~105)

土器片を再利用して整形した製品である。おおよそ六角形を意識して整形しているようにみられる。円形に打ち割っただけのものと、円形に打ち割ったものの断面にさらに研磨をかけて整形したと考えられるもの (97・98・99) とがある。

(3) 石器 (106・107)

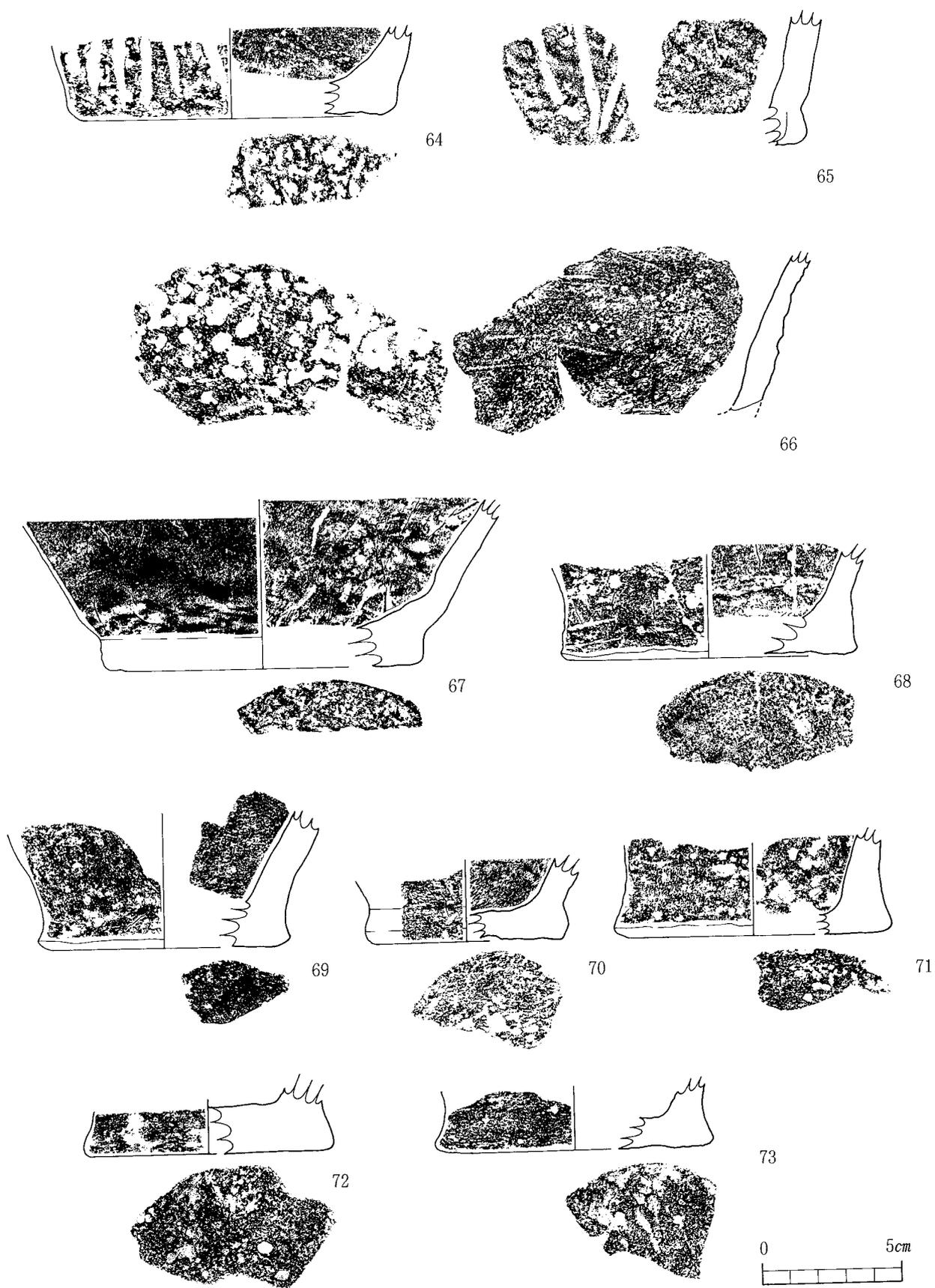
製品では打製石鏃と擦り切り石器が各 1 点ずつ出土した。他には黒曜石の剥片類が少量出土したが、図化できるものはなかった。

・ 打製石鏃

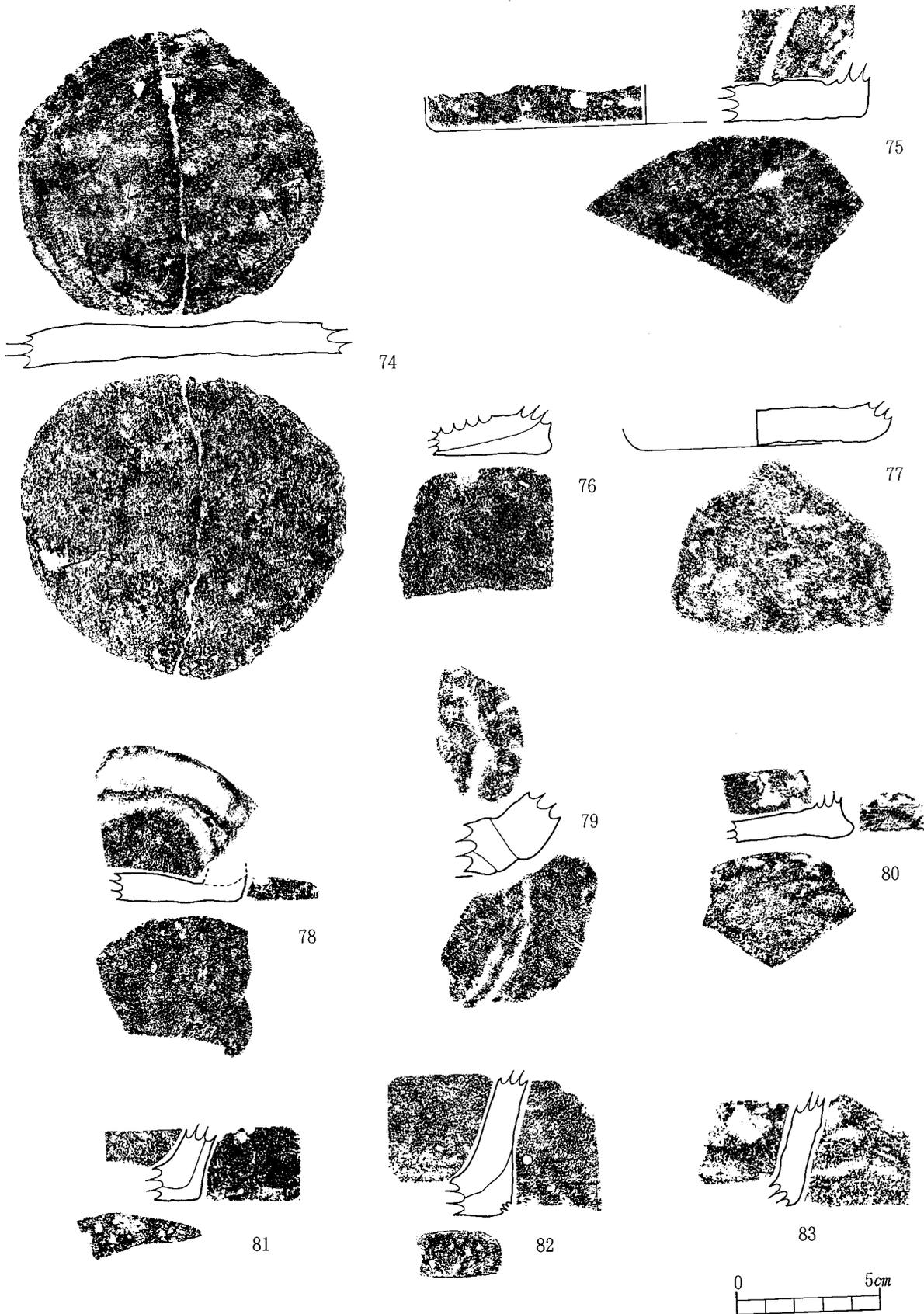
安山岩を加工したものである。刃部加工部分はわずかであり、素材としての剥片部分を多く残したものである。

・ 擦り切り石器

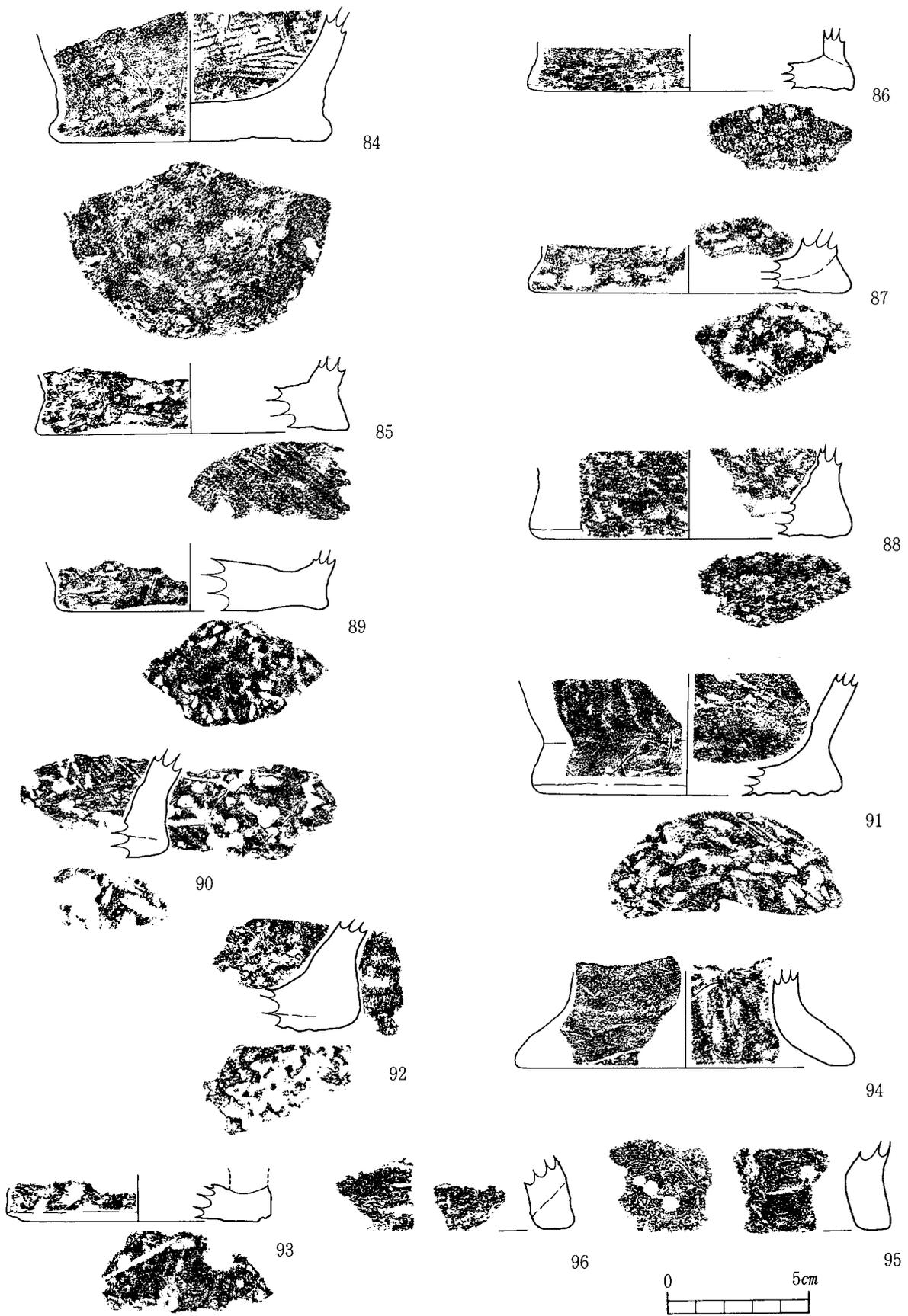
凝灰岩を加工したものである。擦り切りを行ったと思われる部分の幅は最大で 3 mm 程度で横方向に擦った痕跡がみられる。刃部の先の方は擦り切りによる摩擦で丸くなっており、かなり使用されたことが考えられる。



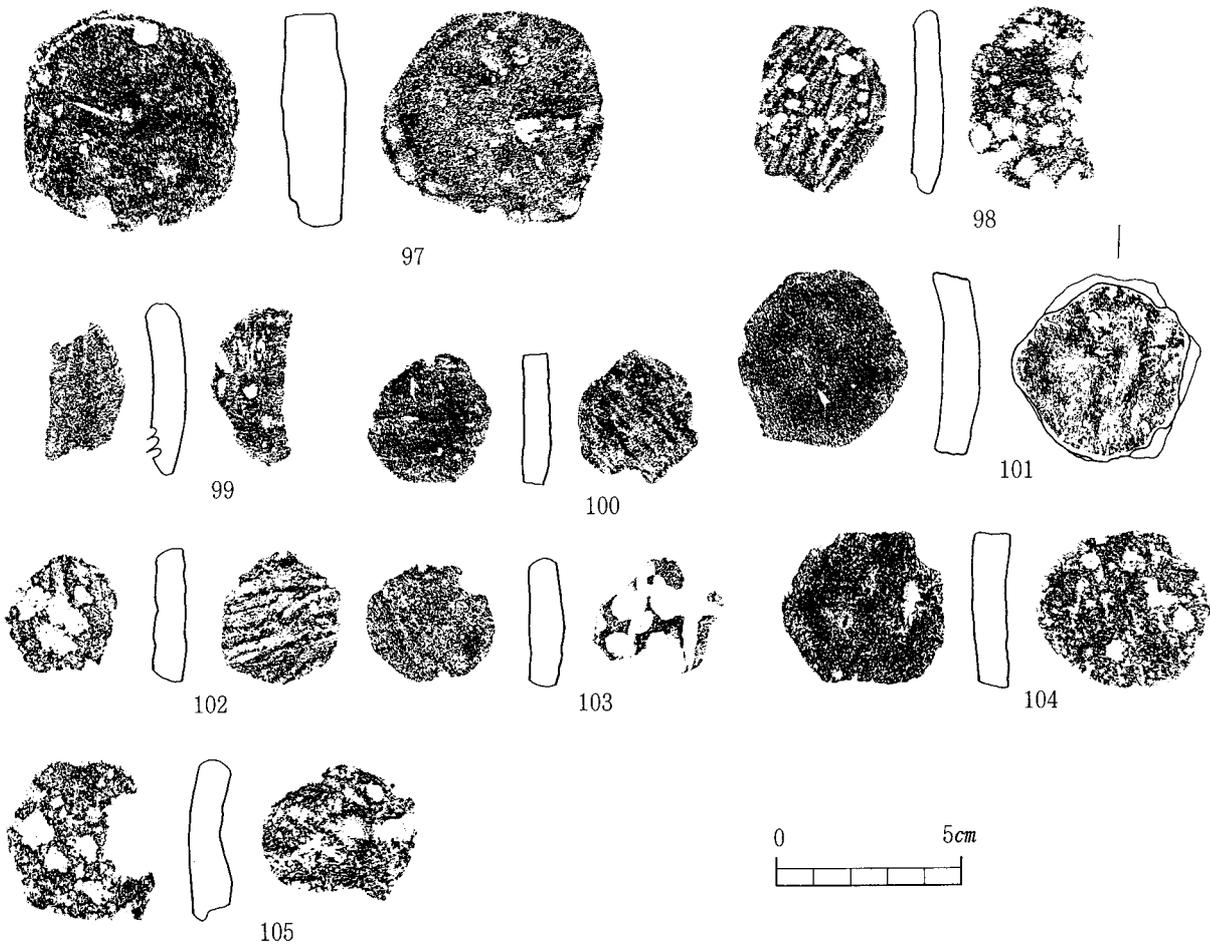
第11図 土器（底部A類, B類①）



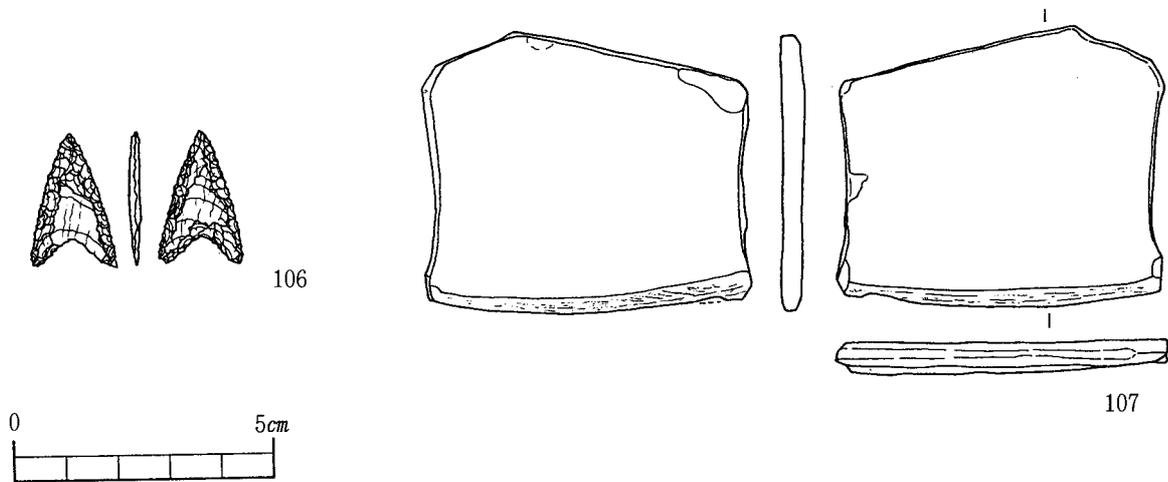
第12図 土器 (底部B類②)



第13図 土器（底部B類③，C類，D類）



第14図 円盤形土製品



第15図 石器

第3表 土器観察表①

挿図 番号	遺物 番号	層	色 調		調 整 ・ 施 文		胎 土	備 考		
			外 面	内 面	外 面	内 面				
5 図	1	IV	褐色	明褐色	沈線文・ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	石英・長石・カクセン石			
	2	III	褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	3	III	灰褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	4	IV	明褐色	にぶい黄褐色	凹点・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	5	IV	黒褐色	黒褐色	凹点・沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	6	IV	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石			
	7	IV	灰褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	8	III	明褐色	灰褐色	沈線文・ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	石英・長石			
6 図	9	IV	黒褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	10	IV	灰褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	11	IV	黒褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	12	IV	黒褐色	褐色	沈線文・ナデ	ナデ・ケズリ	石英・長石・カクセン石			
	13	IV	褐色	褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	14	III	灰褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	15	IV	褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	16	IV	褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ナデ・ケズリ	石英・長石・カクセン石			
	17	III	暗褐色	褐色	沈線文・ナデ	ナデ・ケズリ	石英・長石			
	18	III	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
7 図	19	IV	にぶい黄褐色	明褐色	凹点・沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
6 図	20	IV	黒褐色	暗褐色	ナデ・ユビオサエ	ナデ・ケズリ	石英・長石			
6 図	21	IV	暗褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
7 図	22	IV	褐色	褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	23	IV	褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	24	III	黒褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ケズリ	石英・長石			
	25	III	褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
	26	IV	暗褐色	にぶい黄褐色	半裁竹管文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	27	IV	褐色	暗褐色	半裁竹管文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	28	IV	褐色	暗褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
	29	IV	黒褐色	黒褐色	沈線文・ナデ	ケズリ	石英・長石			
	30	II	暗褐色	褐色	沈線文・ナデ	ケズリ	石英・長石・カクセン石			
	31	IV	暗褐色	褐色	沈線文・ナデ	ケズリ	石英・長石			
	8 図	32	III	にぶい黄褐色	にぶい褐色	沈線文・条痕	ケズリ	石英・長石		小礫含む
		33	III	にぶい黄褐色	にぶい褐色	沈線文・ナデ	沈線文・ナデ	石英・長石		砂粒多
34			明褐色	にぶい褐色	沈線文・ナデ	貝殻条痕	石英・長石			
35		IV	にぶい黄褐色	にぶい褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石	小礫含む		
36		IV	黒褐色	にぶい橙	沈線文・ナデ	条痕	石英・長石			
37		IV	黒褐色	褐色	沈線文・ナデ	沈線・ナデ・疑似縄文	石英・長石			
38		III	黒褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	条痕	石英・長石			
39		IV	灰褐色	褐色	凹点・沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
40		IV	暗褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石			
41		IV	赤灰色	黒褐色	沈線文・貝殻条痕	貝殻条痕	石英・長石	典型的な指宿式の胎土 礫・小礫含む		
42		III	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈線文・ナデ	貝殻条痕	石英・長石			
43		IV	褐色	灰褐色	沈線文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石			
44	IV	黒褐色	明褐色	半裁竹管文・ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石				
45	II	黒褐色	灰褐色	半裁竹管文・ナデ	ナデ	石英・長石				
9 図	46	IV	灰褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		礫・小礫含む	
	47	III	灰褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石			
	48	IV	暗褐色	明褐色	ナデ	ナデ	石英・長石			
	49	IV	暗褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石			
	50	IV	黒褐色	明褐色	ナデ・沈線	ケズリ	石英・長石			
	51	IV	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石			
52	IV	暗褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石				

第4表 土器観察表②

挿図 番号	遺物 番号	層	色 調		調 整 ・ 施 文		胎 土	備 考	
			外 面	内 面	外 面	内 面			
9 図	53	IV	黒褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・ケズリ	石英・長石		
	54	IV	黒褐色	褐色	ナデ・沈線	ナデ・ケズリ	石英・長石		
	55	III	黒褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	56	IV	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石		
	57	IV	褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石・カクセン石		
	58	IV	黒褐色	明褐色	ナデ・条痕	ナデ・ケズリ	石英・長石・カクセン石		
	10 図	59	IV	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ケズリ		石英・長石・カクセン石
		60	III	明褐灰色	明褐灰色	貝殻条痕	ナデ		石英・長石・滑石
61		IV	黒褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
62		IV	明褐色	にぶい橙	ナデ	ナデ	石英・長石		
11 図	63	IV	褐色	にぶい黄褐色	ナデ・磨消縄文	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	64	IV	褐色	黒褐色	ナデ・沈線	ナデ	石英・長石		
	65	IV	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ・沈線	ナデ	石英・長石		
	66		褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	67	IV	明褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	68	III	灰褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	69	IV	灰褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	70	IV	明褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	71	III	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	72	IV	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
12 図	73	IV	暗褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	74		灰褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	75	IV	灰褐色	にぶい褐	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	76	II	黒褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
	77	IV	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	石英・長石		
	78	IV	褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	79	IV	にぶい橙	灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	80	IV	灰褐色	にぶい橙	ナデ	ナデ	石英・長石		
	81	IV	褐色	灰褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石・カクセン石		
	82	IV	褐色	褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石・カクセン石		
13 図	83	IV	褐色	明褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	84	IV	褐色	褐色	ナデ	ケズリ	石英・長石		
	85	IV	灰褐色	灰褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石		
	86	IV	灰褐色	黒褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石		
	87	IV	灰褐色	灰褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石		
	88	III	灰褐色	灰褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石		
	89	III	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石		
	90	IV	褐色	にぶい橙	ケズリ	ケズリ	石英・長石		
	91	IV	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	石英・長石		
	92	II	灰褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石・カクセン石		
15 図	93	IV	灰褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	94	III	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	石英・長石		
	95	IV	褐色	褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	96	III	褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英・長石		
	97	IV	灰褐色	にぶい橙			石英・長石		
	98	III	にぶい褐	灰褐色			石英・長石		
	99	IV	灰褐色	灰褐色			石英・長石		
	100	III	黒褐色	褐色			石英・長石		
	101	III	褐色	黒褐色			石英・長石・カクセン石		
	102	IV	灰褐色	にぶい褐			石英・長石・カクセン石		
	103	IV	にぶい褐	暗褐色			石英・長石		
	104	III	褐色	褐色			石英・長石・カクセン石		
	105	IV	褐色	褐色			石英・長石		

第4章 調査のまとめ

諏訪免遺跡は縄文時代中期末頃から後期初頭にかけての遺跡である。遺構はみられなかったが、遺物は南福寺式・出水式・指宿式と考えられる土器・擦り切り石器・打製石鏃が出土した。出土量としては多い方ではないが、非常に特徴的な遺物が出土している。九州南部のこの時期の土器は口縁部に文様を集約させるものが多い。その中でもこの遺跡から出土している土器はバリエーションに富んでおり、様々なものがみられた。特徴的な遺物としては、口縁部に突帯を持つものや、成川式土器の甕の底部脚台のような上げ底になるもの・擦り切り石器などがある。

土器は口縁部文様帯の状況から、おおよそ南福寺式・出水式・指宿式の3型式に分類することができた。以下に土器の様相をまとめてみた。

南福寺式土器は口縁部文様帯に太形の沈線や凹点を施すもので口唇部は連続した指頭凹点による波状を呈するものである。阿高式土器の終末段階に含まれる可能性のあるものも南福寺式土器とした。

出水式土器は南福寺式土器と同じように口縁部文様帯を持つものであるが文様が細線化したものである。口唇部にねじった粘土紐を貼りつけたものなどもみられる。

指宿式土器は二本の平行沈線による文様構成を基本とする土器である。瀬戸内系の磨消縄文土器の影響を受け、文様に縄文や、貝殻刺突による疑似縄文を施したものもみられる。

本遺跡から出土した土器は絶対量としては少ないがその中で数量的には出水式・指宿式が多く、南福寺式がやや少ないことから中心は出水式・指宿式ということになるだろう。出水式に分類したものの中には口縁部文様帯に突帯をもつものがある。これは鹿屋市榎木原遺跡⁽¹⁾で第XX類に分類されたものに類似しているが、破片であるので詳細は不明である。ここでは口縁部文様帯を意識して突帯をつけているという点を考えて出水式の中に含めた。

本遺跡では出水式と指宿式が出土している。いずれも九州南部の後期初頭に位置づけられている土器であるが、両者の関係についてはあまり明らかにはなっていないようである。出水貝塚や市来貝塚⁽²⁾では出水式と指宿式が同じ層から出土していることから、両者が近い時期のものであるということがいわれている。縄文時代の土器編年でも両者は並行して記載されている場合が多い⁽³⁾。本遺跡でも出水式と指宿式が同じ層から出土している。層位的な関係や同一遺構からの良好な状態での発見例について今後期待したい。

擦り切り石器については干迫遺跡の報告書において使用痕分析が行われている⁽⁴⁾。この中でこれまで擦り切り石器と呼ばれてきたものの中には「擦り切る」ためのものではなく草本植物を「切る」用途に用いた可能性の高いものが多く含まれているということが述べられている。本遺跡で出土した擦り切り石器について観察すると、横方向または横方向に近い斜め方向に擦り痕が認められる。このことから「擦り切る」用途に用いた石器であるといえるだろう。

円盤形土製品はあくまでもおおよそではあるが、六角形に近い形状をしているようにみうけられる。土器の破片を円盤形に整形する過程で偶然に六角形に近い形状になった可能性もあるので類例もみていく必要がある。

本遺跡の近くには竹ノ山A・B遺跡⁽⁵⁾や上ノ平遺跡（平成12年度県立埋蔵文化財センター調

査)などの縄文時代後期の遺物が出土した遺跡がある。縄文時代後期の遺物をみると竹ノ山A・B遺跡では出水式が、上ノ平遺跡では指宿式が出土している。特に上ノ平遺跡は距離的にも近く、諏訪免遺跡との比較資料となり得るであろう。今回の調査は小規模なものであったが、出土遺物としては非常に密度が高いものであったといえる。さらに遺跡の範囲は北から東の丘陵へ広がっているため、今後調査が行われる機会があれば、さらに大きな成果が得られることが期待される。周辺の遺跡との比較・検討を行いながら、諏訪免遺跡周辺の縄文時代後期前半の様相を考えていくことが必要であると考えます。

註

- (1) 弥栄久志・前迫亮一 1987 『榎木原遺跡』
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)
鹿児島県教育委員会
- (2) 新東晃一・堂込秀人 1991 『川上(市来)貝塚』
市来町教育委員会発掘調査報告書(1)
市来町教育委員会
- (3) 河口貞徳 1980 「遺物」
『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
鹿児島県教育委員会
- (4) 御堂島 正 1997 「鹿児島県加治木町干迫遺跡出土石器の使用痕分析」
『干迫遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22)
鹿児島県立埋蔵文化財センター
宮田栄二氏からの御教示も加味した。
- (5) 黒川忠広・桑波田武志 2001 『竹ノ山A・B遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(29)
鹿児島県立埋蔵文化財センター

圖

版

図版 1



調査地全景
(西から望む)



遺物出土状況



完掘状況(東から望む)

図版 2



A区 土層堆積状況

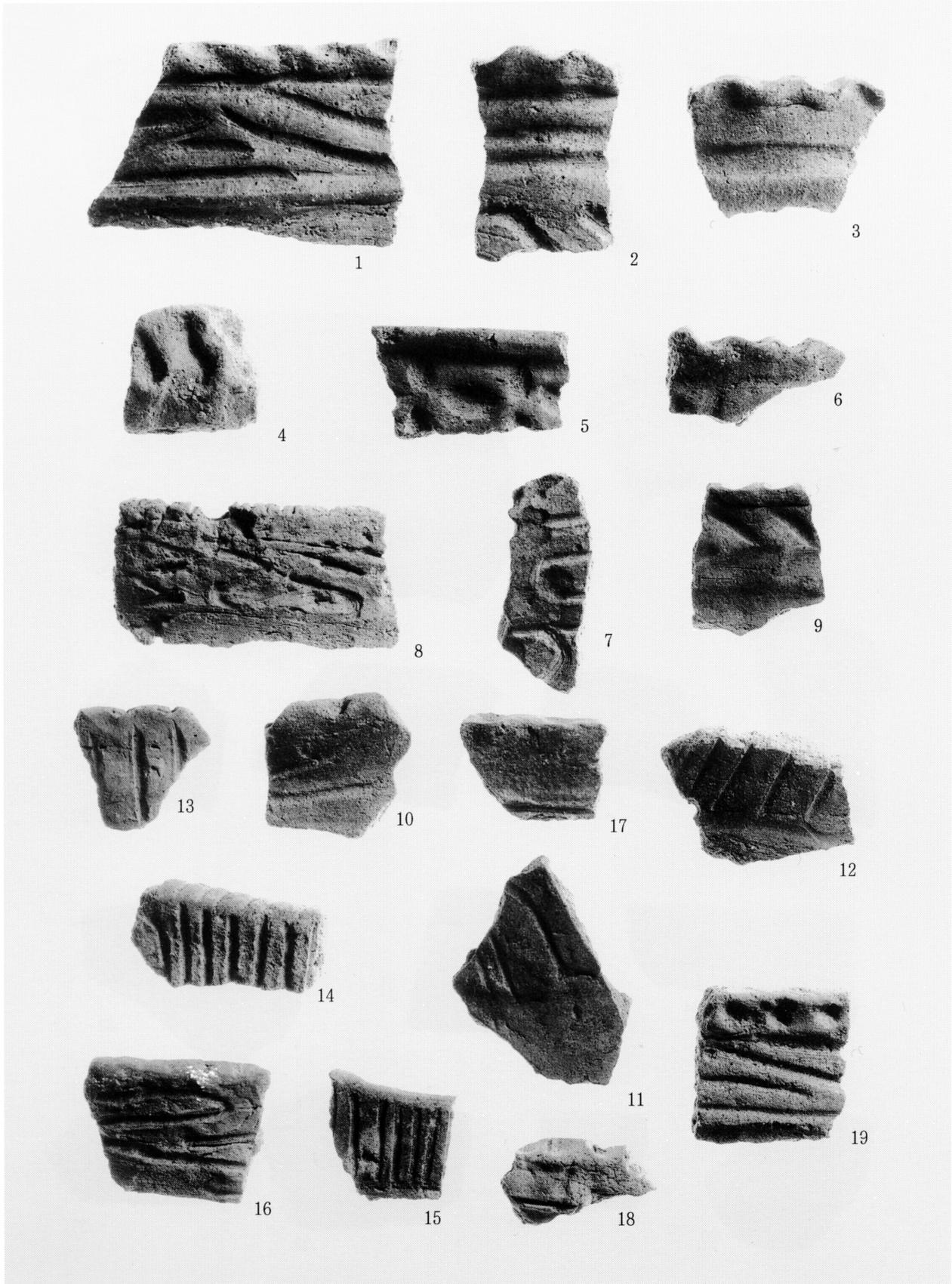


発掘作業風景



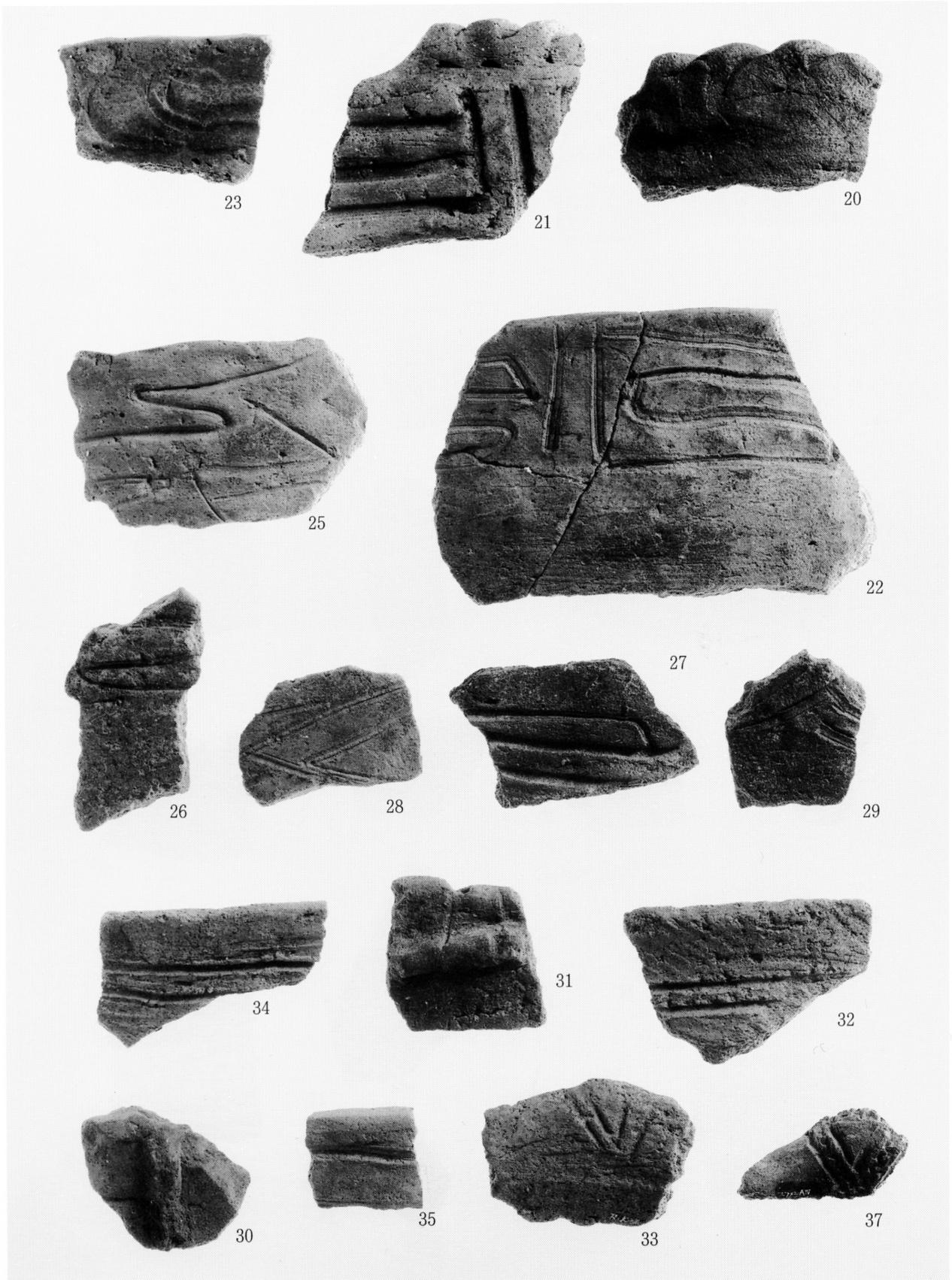
B区 土層堆積状況

图版 3



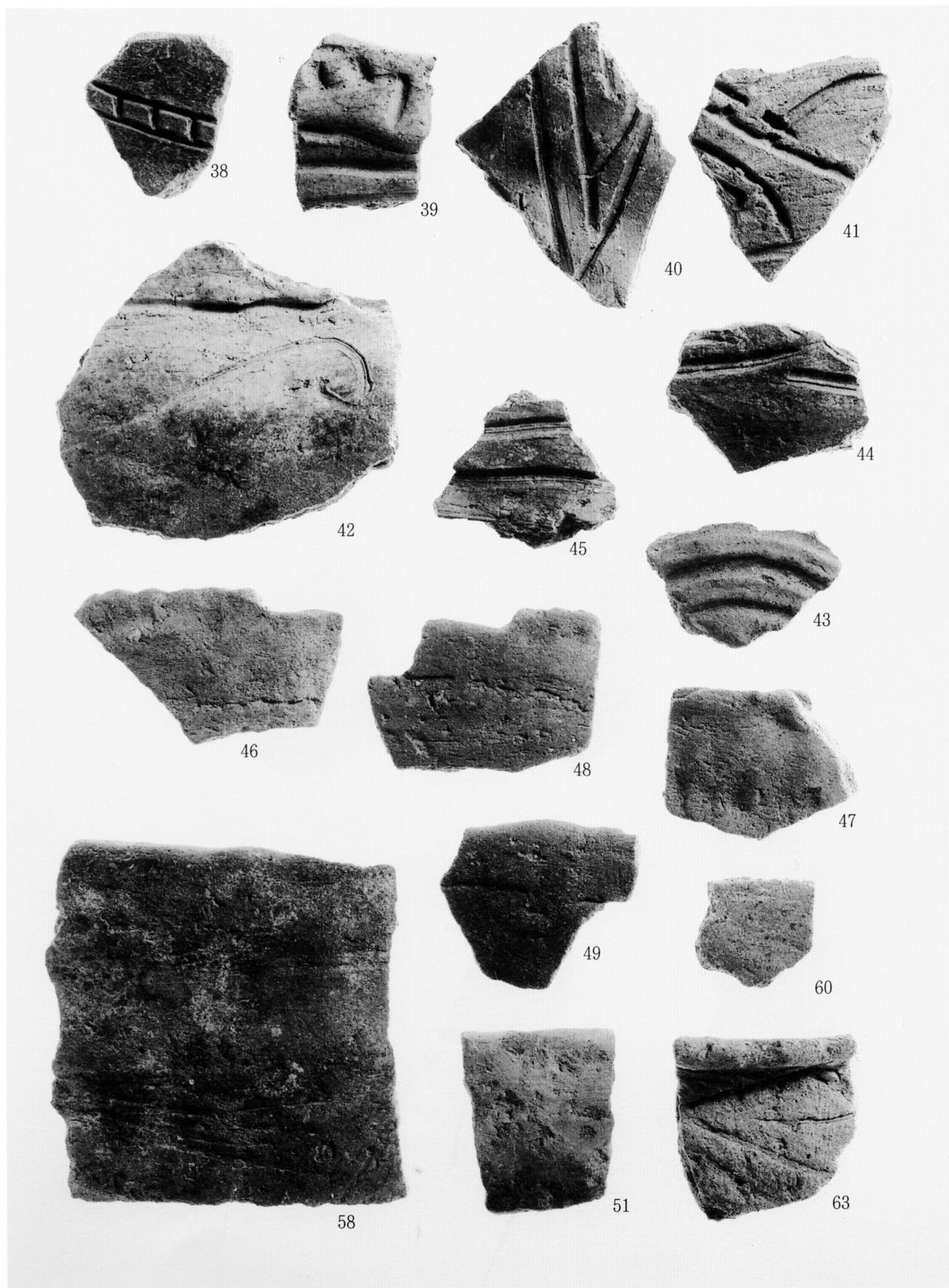
出土遺物 (1)

图版 4



出土遺物 (2)

图版 5



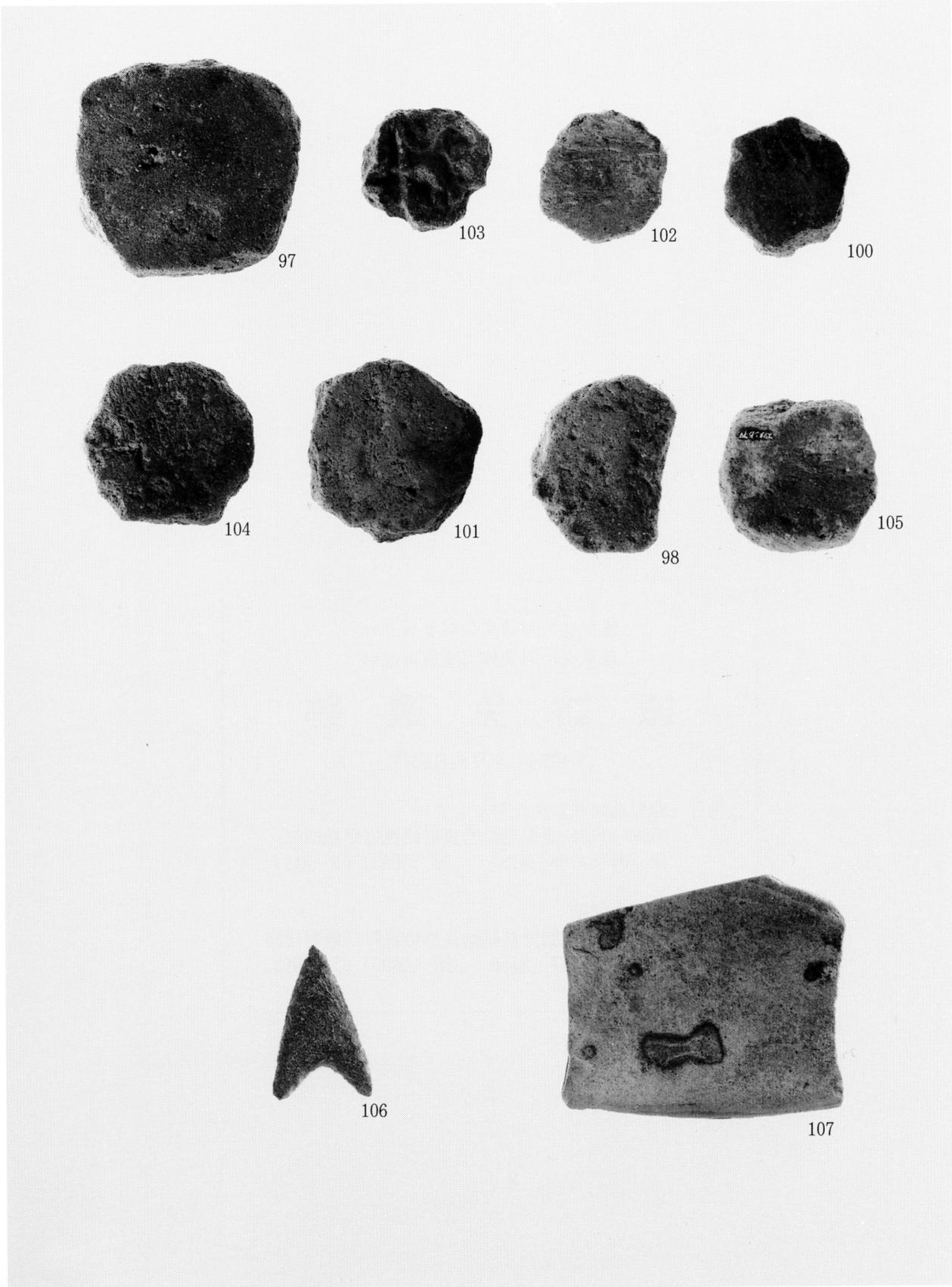
出土遺物 (3)

图版 6



出土遺物 (4)

图版 7



出土遺物 (5)

鹿児島県埋蔵文化財センター
埋蔵文化財発掘調査報告書(44)

諏訪免遺跡

平成14年3月30日発行

発行 鹿児島県埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252
TEL (0995) 65-8787 FAX (0995) 65-8117

印刷 (有)梅木印刷
〒899-5412 鹿児島県始良郡始良町三拾町1888
TEL (0995) 67-2256 FAX (0995) 65-7992